

---

# ペナルティ3

謎沢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペナルティ3

### 【Nコード】

N0243B

### 【作者名】

謎沢

### 【あらすじ】

ペナルティシリーズ第3弾（ついでにペナルティ、ペナルティ2もご覧ください。）

ペナルティ3 - 1 (第214話〜第220話) (前書き)

“ ご覧になる方へ ”

このページは、ペナルティシリーズ第3弾のページです。内容が分かりにくいことがあると思いますので、ペナルティのほうをまずご覧になれることをお勧めします。

なお、ページにつきましては、作者の作品をご覧ください。

## ペナルティ3 - 1 (第214話〜第220話)

Ⅱ 第214話 地球Ⅱ

地球、それは、46億歳。地球、それは、生命を育むことの出来る唯一の星。

しかし、その地球が、約50年前からおかしくなってきた。

人間はそのおかしくなったことを地球破壊というらしい。

しかし、人間はそれを止められない。やめられない。かっぱえびせん(ってこれ余計。)

さて、地球にある少年がいた。2004年の春のうらら。さあ。あと100メートル

名前はペナルティ。まあ、経歴はこの前を見てね(って、随分、酷い。それでも人間か。お前。)ペナルティは、悪魔に襲われていた地球をある友人たちと戦った少年だ。(って、よく分かんねーし。)

ところで、なぜペナルティは、なかなか活躍していないんだと思うの方がいるみたいです。

なぜでしょう。それは、いろいろ理由があつたようです。

そんなペナルティの前に一人のウーマンじゃなくて、マンが(英語と日本語を混ぜるな。)ペナルティを訪れた。そう。それは、李だった。しかし、なぜ、李がペナルティのところへ訪れたのだろうか。ペナルティもそう思った。もしかすると熱斗を助けるなんていうこと?など思い李に聞いた。

「ああ。熱斗は無事だ。悪魔は、もう二度と人間を襲わないことを誓ったそうだ。それよりも、もしかすると、熱斗の存在が消えてしまつかもしれないんだ。」

その言葉にペナルティは耳を疑った。

「一体、どういことですか。実際に会ったじゃないですか。」  
それに李が答えた。

「ああ。確かにそうだ。しかし、時空には欠点がある。それは、途中で未来が変わると、その未来が瞬時になくなるんだ。その空間が燃え尽きるんだ。」

その言葉はよくわからなかった。しかし、それがとても重要なことだということぐらい時空間のことについて知らないペナルティにだってわかる。

「どうして、そんなことが起ころうとしているのですか。」

それに李はこう言った。

「それは、環境破壊だ。」

それは、なぜ？

Ⅱ 第215話 未来のためにⅡ

李は続けた。

「このまま環境破壊が続けば、あと10年も持たない。」

ペナルティは驚いた。あと10年。ちょうど社会人の仲間入りのときに、今までの人間の行った行為によって、地球が、そして、熱斗が滅んでしまうのだ。

そういえば、もしも、地球が住めなくなったら、地球を出て、コロニーとかいうものに移り住めばいいと誰かがいつていたのを聞いたことがあった。しかし、あと10年でそれが完成するとは思えなかった。

ペナルティは李にどうすればいいのか聞いた。それに李は答えた。

「それは、君自身にある。」

「それは、一体どういうことですか。」

ペナルティは李に尋ねた。

「君は、熱斗やマオと一緒にいたからこそ、地球を助けられたんだ。」

しかし、ペナルティは思った。確かに、マオや熱斗の隣にいたが、自分は、何も役に立てていない。みんな、熱斗やマオがやってつけて

きたからこそ、この場所に今いるのだ。

李は、ペナルティの気持ちを分かっていた。そして、こんな言葉をかけた。

「さあ、旅立て少年よ。」

なんか、時代劇にでも登場しそうなセリフだが、なんとなく、ペナルティは意味が分かった。

それは、半端な成長ではなく真の成長をペナルティに李は求めたのだ。

しかし、自分がどうすれば地球を助けられるのだろうか。

自分にはなにも力がない。まるで、裸の王様がライオンと戦うのとおんなじだ。

李は言った。

「おまえ自身に力というのはついて来るものだ。安心しなさい。」

しかし、ペナルティはそんなことを言われても、心配だった。

一体、どうすれば地球を助けることが出来るのだろうか。

そんなことが頭から離れなかった。しかし、李は、さらに指示した。

「ペナルティは、2006年に行ったよな。そして、あの後、実は、悪魔のせいではない、地球の変異があつたんだ。」

そして、ペナルティたちはまた2006年に向かった。

## Ⅱ第216話 第一回地球異常抑制会議Ⅱ

2006年夏、日本全国で、低温で、しかも、日照不足で野菜は高騰し、世界では、熱波が欧州を襲った。さらに、北極では、海面の氷が多く解けた。

しかし、これだけでは、地球の異変は収まらなかった。日本では、ちょうど日本沈没と日本以外全部沈没が公開され、さらには、アメリカ沈没などという映画があつた。しかし、まさか、本当におきると思っていない。人間というのは所詮、そんなものである。しかし、そのことは、ペナルティは知っている。そして、李さんも

そのころ、日本である会合が始まった。

「第1回、地球異常抑制委員会を開催する。」

そこにある人が言った。

「これで委員会。」

そのギャグに会場に木枯しが吹いた。しかもとても冷たい風だった。その風が吹き終わった後、司会者がおそろおそろ言った。

「それでは、気を取り直して、事案について話させていただきます。

…」

男は、そういうと、ある事例を言い始めた。

「ここに熱斗という少年がいるとします。ある日、その少年が流しそうめんをやったとしましょう。みなさんは、水道がなぜ出てくるのか知っていますか。それは、電気を使って、水流に圧力をかけて、そして、みんなの家に届くのです。しかし、電気を作るには、石油が実に40パーセント以上を占め。さらには、それに変わる方法もいまいちです。それなのに、流しそうめんなんていう贅沢で、さらには地球を破壊するような行為は許しがたき行為です。」

そのころ、熱斗は流しそうめんをやっていた。

“ハクシュン”

熱斗はくしゃみをした。

「熱斗くん風邪引いたんじゃ？」

ロッキーマンが心配していた。しかし、夏なのになぜ。クーラー？

「誰かうわさしているんだよ。」

熱斗が言った。

「しかし、誰がうわさしているんだろう。」

熱斗は少し疑問に思ったが、まさか、過去である会議の話題になっているなんて考えられなかった。（というよりも無理矢理と言ったほうが正しいかもしれない。）

そして、司会者は次の例を出した。

「その次に、先ほど、電気は火力しか作れないと申しましたが理由があるのです。まず、風力発電。これの問題点は、鳥が羽に巻き込まれて、あえなくあの世に行ってしまうことです。」

そのとき会場の誰かが、

「ちゃんちゃちゃんちゃ。ちゃちゃ。（これは、ゲームで失敗したときによく流れる効果音です。）」

また会場がしらけた。

そして、ついに会場の司会者が怒った。

「おまえ、ふざけとんのか。この馬鹿野郎。少しはまじめに聞け、

。」

ついには、何を言っているのかわからなくなるぐらいになっていた。そして、司会者が落ち着いたところで、会長らしき男が立った。まだ、第一回目ということもあり、みんな会長を見たことがなかった。会長はみなに言った。

「自然を大事にしなければなりません。しかし、政府に環境省が出来ても状態は変わらない。なぜでしょう。それは、人間が今の生活を離れたくないからです。だったら、無理矢理でもとめましょう。」

ストツプザ温暖化& amp; #8252;。」

しかし、だれも、そんなことを目的としていなかった。ただ聞きに來ただけという人が多かった。

しかし、会長はそんなことを知っていないのか、ある作戦を実行することになっていた。

その頃、李とペナルティは、2006年に來た。とはいっても、何をやればいいのか分からない。

ペナルティの出番がまさか、会長との対決とは思っていなかった。

ペナルティはそのことをまだ知っていない。そして、そんなことよりも、熱斗たちをどうやって助けるかしか考えられなかった。

ペナルティはなかなか思いつかなかった。しかし、李は何も口を出さなかった。



その頃、会長は、作戦の準備を確実に進めていた。それは、一体。

Ⅱ 第218話 日本大停電。Ⅱ

その年の8月にクレーン車が送電線に引っかかり、東京中が大騒ぎになった。

しかし、会長はそんなことではないことを考えていた。それは、ウイルスを流して、発電所の機能を打ち壊すことだった。

しかし、まだペナルティは知らない。

そして、会長はウイルスを侵入させた。

ウイルスによつて、火力発電所はどんどん停止した。

「やった。これで環境を救える。」

会長によつて、町はどんどん停電して行つた。

ペナルティたちはたまたま町にいた。

そして、いきなり町の停電に遭遇した。

李は言った。

「誰かの仕業かもしれない。ともかく電力会社に忍び込もう。」

そして、李とペナルティは電力会社に向かった。

会長は、至福の時を過ごしていた。自分が行つた行為によつて、世界に貢献できる。こんないいことはないと会長は思った。

そのころ、ペナルティたちは、電力会社にいた。

「これを使って、PETをつなぐんだ。」

ペナルティは驚いた。

「大丈夫なんですか。PETをつないで。」

李はうなずいた。ともかく、どうにかしなければならなかった。

ペナルティは、何をしにきたのか分からなくなっていた。

そして、ペナルティのナビが言った。

それは、やはりウイルスのせいだった。しかし、ウイルスをつぶすことができない。チップを持っていなかった。このままほおっておいたら、電力会社も停電になってしまう。今は、なんとか補助電力

でまかなっているが…。

どうすればいいのか、ペナルティは困っていた。そのときだった。

「ロックマンだ。」

ナビは言った。

ペナルティは周りを見回った。そこには熱斗がいた。

「なんで、こんなところにいるんだ。」

ペナルティは驚いた。

熱斗はなぜこんな所にいるのだろうか。

熱斗は言った。

「助けに来たよ。」

Ⅱ 第219話 ウイルスの犯人Ⅱ

誰がこんなことをしたのだろうか。

そのとき、熱斗たちの前に一人の男が来た。

そして、男は言った。

「よくも私の作戦を失敗させたな。お前らは、いずれ地獄を見ることになるだろう。」

「誰だ。」

熱斗たちは警戒した。

「俺は、環境の守り神だ。人間に対抗するために、誰も作ったことのないウイルスを一瞬にして消してしまうとは、お前たちは凄い、しかし、お前たちは、もうすぐ死にたえられるのだ。」

熱斗たちは、男に不気味なものを感じた。

男はさらに話を続けた。

「お前らにヒントを与えてやる。古池屋 買わずに飛び込む 水の音。だ。」

熱斗たちには意味が分からなかった。しかし、男はもう消えていた。バニッシュ。

一応、停電は直り、再び、環境について考えることになったペナル

テイ。そして、そのことを熱斗に教えなければならなかった。

「そんな馬鹿な。」

熱斗はそう思った。

大体、なぜ今、ここにいるんだと熱斗は思った。確かにそうだ。

しかし、それは、うまく出来ているのである。いろいろなことが…。その夜、ペナルティは考えていた。しかし、いくら考えても、答えは見つからない。

その答えは、意外なところから出てくるものだ。

そして、次の日だった。

ペナルティは早く目が覚めてしまった。なぜだろうか、今日はとても大きな事件が起こりそうな予感だった。しかも後もう少しで…。

ペナルティは、外へ出て散歩をした。

そして、公園にたどり着いた。そこには池があった。しかも、池のほとりには、屋台が立てられていた。しかもその屋台は古池屋。

ペナルティは背筋がぞつとした。よく見ると古池屋の横の池のほとりに何かが浮かんでいる。

それは、あの男だった。ペナルティはびっくりした。しかし、男は動かない。

男は死んでいた。

なぜ、男が死んでいるのだろうか。

ペナルティは急いで李と熱斗を呼んできた。

そして、李は遺体の横の紙を見つけた。そこにはとんでもないことが書かれていた。

「第220話 キーワード」

その紙にはこう書かれていた。

“この世は、地獄とかす。平安時代は、末法思想というのが広がった。その末法思想とおなじようなことが、この世でおきる。人間の手によって。それを抑えられなければ、地球に明日はない。お前た

ちの健闘を祈る。」

そう、そこに地球を救う鍵があったのだ。  
この短い文章の中に。

「もうすぐ、地球に危機が訪れる。」

ペナルティはどうやら回答を得たらしい。そのとき、警察が来た。  
警察はペナルティたちを怪しんでいたが、すぐに疑いが晴れた。

そんなちっばけなことよりもっと重要なことが今、地球に向かって  
ていた。

それをペナルティたちは知った。

多分これはあっていると確信した。

そして、次の日、早速地球に異変が起きた。

それは、地震だった。しかもただの地震ではない。地球全体が揺れたのだ。

すぐに国際機関は、会議を開いた。こんなことが起こるはずが無いと。

これは科学者にも分からなかった。

そのころ、熱斗たちに不思議なことが起きた。

それは、またもやペナルティに起きた。

朝、起きたとき、誰かが声をかけてきたのだ。しかし、どこから聞こえてくるのか分からなかった。

その声は言った。

「あなたたちは知ってしまいましたね。真実を。」

「あなたは誰なんですか。」

ペナルティは聞いた。

「それは、答えられません。また、会うことも出来ないでしょう。」  
そして、その声の主は言った。

「あなたたちには、力が備わっています。あとはその力を存分に発揮してください。答えは、今までの行動にあります。」

それを言い終わるとまったく声は聞こえなくなった。

「どうした。」

李が言った。

「いいえ、なんでも。」

ペナルティは、そう言った。

一体、何なのであろうか。熱斗たちとの出会いから始まったことをペナルティは思い出した。

そこには必ずマオがいた。そして、そこには七つのしるしがあった。「そうか。」

ペナルティは頭にひらめいた。それは果たして正しい答えだったのだろうか。

## ペナルティ3 - 2 (第221話〜第230話)

Ⅱ第221話 哀れな戦いⅡ

その頃、熱斗たちのところにある男が派遣されようとしていた。そして、熱斗たちはその男と戦うこととなるのである。

熱斗たちの前に男が現れた。そして、男は言った。

「哀れなものへ。人間など所詮そんなものだ。」

「なんだと。」

熱斗が言った。

「その少年よ。人間の味方をしていると、ろくなことがないぞ。」  
男は例を挙げた。

「人間とは欲の塊だ。それを人間は知っている。しかし、それをやめようとしな。たとえば、人間は、CO2をたくさん作っている。」

熱斗は言った。

「そんなに人間が欲深いというのか。」

熱斗は少し怒った。男はそれでも冷静にこう言った。

「じゃあ、パン食い競争でも行うか。」

男は手を打った。そして、地面が揺れ始めた。前にレース会場が出て来た。ペナルティは驚いていた。しかし、熱斗は燃えていた。

「パン食い競争のルールなど分かっているよな。」

男は馬鹿にしたような言い方をした。どうやら、熱斗を挑発しようとしているようだ。

「では、もし、私が負けたら、俺は自分でこの毒を飲んでやる。」

ついには、男が負けたら毒を飲むとまで宣言し始めた。しかし、まさかこれがなだとはまだ熱斗たちは気づかなかった。

そして、男と熱斗は、スタートラインに立った。

「それでは、ヨーイ、スタート。」

男と熱斗はパンを目指して走った。熱斗は一つ目のパンに喰らいついた。しかし、男は、パンには興味を示さなかった。そして、男は立ち止まって言った。

「トラップカード償還& amp; #8252;」

男の声によつて、熱斗はつるされてしまった。そして、男は言った。「本当にルールが分かっていなかったようだな。」

男は薄気味笑いをした。熱斗は必死で抵抗した。

「そんなことをしたつて無駄だ。お連れとともに牢屋に入れろ。」

そして、熱斗とペナルティは地下にあつた牢屋に閉じ込められた。「くそ。」

熱斗は地団太踏んだ。

## Ⅱ 第222話 巨大食虫植物Ⅱ

熱斗たちの前に男が現れた。

「よくまあ、あんな罠に引っかかったな。しかし、安心しろ、ここから出してやる。地獄というところへな。」

男の顔は怖かった。薄暗いところで見たからかもしれないが、それでも十分怖かった。

「おとなしく待っている、明日にはここからあの世に出発だ。」

男は、甲高い笑い声とともに消えていった。

熱斗は言った。

「いつもごめん。俺が足を引っ張っているんだよな。」

「いいや、そんなことないよ。」

ペナルティはこう答えた。

「いや、いいんだ。俺があんなことをしたせいで。」

「相手がわるいんだよ。」

ペナルティが諭す。

「俺は地獄に行かなきゃ行けないんだろうな。」

「そんなことないよ。だって、今までピンチのときに助けてくれた

「じゃなか。」

熱斗は言った。

「俺って、今思ってみると、みんなの助けがあったからこそだと思  
うんだ。一人だけじゃあ、何も出来ない。そんな人間、役に立たな  
いと思うんだ。ましてや、ウィルスを倒すだけじゃあ。」

熱斗はどうやら、悩んでいたらしい。表面には出さなかったものの、  
ペナルティは少し、かわいそうだった。思春期だということは自分  
も分かっている。しかし、何もフォローできない。自分の方が役に  
立たないと思った。

ふたりは自分のことを見つめていた。

そんな夜だった。

次の日。

「起きろ。」

冷たい床の上で寝ていた二人を起こしたのはあの男だった。

「やっと地獄で閻魔大王に会えるんだ。うれしいだろ。」

男は、となりの牢屋の門を開けた。

「お前らは、食虫植物のえさとなるんだ。」

「まさか。」

ペナルティは疑った。しかし、その食虫植物はただの食虫植物では  
なかった。

「巨大だ。58・5倍はある。」

ペナルティは言った。しかし、58・5倍という細かい数字まで出  
さなくてもいいような気がする。一体、熱斗たちはどうなるのだろ  
うか。

Ⅱ 第223話 倒せ& a m p ; # 8252 : 食虫植物 Ⅱ

熱斗たちは危機に瀕していた。

このままでは食虫植物に食べられてしまうかもしれない。

熱斗は思った。もしかすると、クロスフュージョンできるかもしれ



ない。前だってそうだった。

そして、いちかばちの大勝負にうって出た。

「ロックマン。」

そして、シンクロチップを入れた。

うまくいくのか。ペナルティは固唾を呑んだ。しかし、その必要はなかった。

熱斗とロックマンはうまくクロスフュージョンできた。

男は悔しそうだった。しかし、これが運命というものなのである。

熱斗とロックマンは、どんどんと食虫植物を切っていった。

そして、ついに熱斗とロックマンは勝ってしまった。

「やった。」

ペナルティは熱斗とロックマンに声をかけた。

何とか命を取り留めた3人。

その頃、男はあるところへ向かった。それは、本部だった。あの会長の代わりに席を占領していたのは、江藤だった。江藤は言った。

「お前、それでも人間か。」

まるで人間のように扱っていなかった。

「お前、ここから落ちるか。」

江藤はこう聞いてきた。そこは、ビルの13階。落ちれば、死が待っていた。

江藤の周りの部下がこう言った。

「早く落ちろよ。」

そして、江藤の部下が無理やり男を立てさせた。

「じゃあな。はっはは。」

江藤の部下は男を窓から落とした。そして、こんな残酷な言葉を残したのだ。

しかし、江藤の部下は悪気がないようだ。

「くそ、あの光熱斗とか言う奴、俺大嫌い。あんながんばるとかい言葉につき雨後されている奴が、一番嫌いなんだよ。」

江藤は机を蹴った。

「そうだな。」

部下たちもそう言った。

「じゃあ、殺すか。」

とんでもない言葉が江藤の口から発せられた。

「よし、行こうぜ。」

部下たちも江藤の作戦に賛成した。それは、もう殺し屋の雰囲気になっただけ。

しかし、まだ、熱斗たちは知らなかった。

## 「第224話 残酷さ」

江藤は熱斗たちのところへ向かった。

そして、ついに江藤は熱斗たちを見つけた。

「お前が光熱斗か。」

江藤は偉そうに言った。

熱斗は少し寒気がした。江藤は続けてこう言った。

「俺は、お前が凄く大嫌いだ。だから、君は、人間のくずだ。お前は、殺される運命なんだ。」

そして、江藤は部下とともに熱斗に襲い掛かってきた。

「やめろ。」

熱斗は言った。しかし、誰もそれは、止められなかった。

「さっさと死ね。」

とんでもないことを江藤は言った。熱斗は殴られ、さらには倒され、腹を蹴られている。

「ペナルティ……。」

熱斗は言った。しかし、ペナルティにはどうしようもなかった。ペナルティは自分には勝てないと思った。ただこれを見ているしか自分には出来ない。

そんな自分が悲しく見えた。自分に力があれば、環境破壊を止めるために来たのに、熱斗破壊になってしまっている。

なんで神というものは、とても不公平にしているのだろうか。

神はみんなを平等にできないのか。

あるものには、つらい体験をさせて、あるものには、力を与える。こんな不公平なことがあっていいのだろうか。

「神は人間や動物たちを見放したいのだろうか」

とペナルティは思い始めてしまった。

「そうだ、神は、人間や動物たちを見放すために、人間に環境破壊を行わせているんだ。どうせ、神はしまいには、人間たちを殺し合いに発展させて、完全に地球が元に戻らないようにしてしまうんだ。そんな運命なら、僕はそれでいい。もう僕の力では何もできない」

それは、ペナルティにも分からなかった。しかし、どこかで見覚えがあった。

夏のある日・・・

ペナルティがとっても小さい頃。

お母さんとあと誰だか分からない子供と一緒に歩いていた。

そして、横断歩道を渡ろうとしたとき、悲劇が起きてしまう。

Ⅱ第225話 消え去られた記憶Ⅱ

それは、一瞬の出来事だった。

横から猛スピードで走ってくるダンプカー！

そして、母親は、ペナルティを歩道に突き飛ばした。

その瞬間だった。

母親と小さな子供のまわりは、血の海になった。

ペナルティは怖かった。ダンプは、過積だった。

その横断歩道は、ちょうど坂のところにあった。

ペナルティは、それで、今まで忘れていたことをすべて取り戻した。

ペナルティはさっきのペナルティではなかった。完全に思い出した

ペナルティだった。

そつだ。僕は約束したんだ、あの時。

お父さんと一緒に。

“絶対、これからは、人を傷つけない。人を殺さない。そして、人を守る。”

それは、人間だけではない。動物もだ。

今は、お父さんが再婚したから、その悲痛なことは頭の奥深くに隠れていた。

しかし、今、それは、泉のように湧き上がってきた。

さっきの自分は、純粹でもなんでもない。ただの曲がつたパイプだ。ペナルティは、李さんのことを思い出した。いつの間にか李は消えていた。

李にあつたときのことを思い出した。

李は、僕のことを純粹だと言つた。しかし、それは、完全に純粹ではなかつたんだ。それを、磨きなおしてくれた。それは、李さんだけではない。熱斗やマオや八神たちもだ。

「今、助けるぞ。」

ペナルティは、気合が入つた。もう江藤など怖くなどない。自分の信念を貫けがいいんだ。

ペナルティは、パンチのひとつひとつに気合をいれた。それは、あの七つのしるしのひとつの力だった。しかし、そんなこと、ペナルティは分かつてはいない。

でもそれでよかつた。それは、梅園先生も仲間だからだ。

ペナルティのパンチに江藤は苦しんだ。そして、引き上げていった。

「熱斗。」

ペナルティは、駆け込んだ。

しかし、熱斗は気絶していた。

そこに李が現れた。

Ⅱ 第226話 李の正体 Ⅱ

李は、ただ立っているだけだった。

「熱斗が…。」

ペナルティの問いかけにも何も答えなかった。

ペナルティは、聞いた。

「あなたは一体。」

李は答えた。

「よくぞ、そこまで成長しましたね。私は、神の近くにいる存在のものです。」

李は続けた。

「あなたはとても成長した。このものは、次期に元の世界に戻されます。そして、あなたと過ごした記憶はかき消されるのです。時間も元のまま、結局は今までのことは幻界に過ぎなかったのです。しかし、存在しているものは存在しています。たとえ、人の記憶は消されても、人の存在は確かなのです。人の心も変わっています。これからは、別々の道を歩んでいくことでしょう。」

ペナルティはさらに聞いた。

「じゃあ、この温暖化というのはどうなるんですか。これも幻なのですか。」

李は首を横に振った。

「では、本当に。」

ペナルティは驚いた。

「この世界は、幻界であるようで、幻界ではないのです。これは、説明が難しいのです。それよりも、私から最終のテスト課題を与えます。それは、あなたの持っている力で地球を救ってください。それが、私の言葉です。私は、あなたがそこまで成長するとは思っていませんでした。それは、うれしいことです。」

そういうと李は消えていった。

ペナルティの前にはとても重要な課題が突き付けられた。しかし、ペナルティはあきらめないと心に誓った。

また元の世界に戻すのだ。俺なら何でもできる。

そうペナルティは心に誓ったのだった。

神は天から見ていた。

「どうやら、また、一つ仕事を成し遂げたみたいですね。」

李の前にはきれいな女性がいた。まるで、どこかのゲームのようだ。

「はい。また大変でした。」

李は神に報告した。

「私は、前の神から次いで以来、こんなに大変だったものは見たことがありませんでしたわ。」

神は、うれしそうに言った。

「これで、また、まっすぐに生きる人間が増えましたね。」

神は少し疲れているようだった。李も神よりも疲れている。あとは、ペナルティの結果次第だった。

## Ⅱ 第227話 環境破壊Ⅱ

ペナルティは一人になった。今までのようには行かない。とても重要なことを一人で行うのだ。自分には力がある。

ただそれを信じるだけでよかった。

そのころ、地球には危機が迫っていた。

東海地震が発生し、関東と関西方面への連絡手段が寸断された。

人々は怖がった。

九州では、台風16号が上陸し、壊滅的な被害をこうむった。

その台風は、次の日には四国に上陸し、四国にも多大な影響を与えた。

一方、富士山では、プレートが、富士山のマグマを刺激、富士山が大爆発した。

日本はだんだんと沈み始めようとしていた。海にはない。日本は、人間たちの行為によって、こうなってしまった。しかし、まだ人間たちは分かっていなかった。

それどころか、これを北朝鮮の仕業だと信じ込んでしまっていた。

町には、疑心があふれていた。  
これをペナルティは解決しなければならなかった。ペナルティは思った。

この現象を止めるには、あれを使うしかない。  
と。

それは、七つのしるしだった。

未来のためにもこれしか方法がなかった。それを李は天から見つめていた。いや、李は怖がっていた。これを七つのしるしで解決しようとするれば、七つのしるしは消滅してしまう。それは、定めだった。しかし、もうペナルティをとめることはできなかった。

ペナルティは、心に訴えた。

“ 我の心よ。今の状況から人々を救い出すために封印された力を使う”

それと同時に天が光った。

人々は天を見た。それと同時に心の中から悪が消えていった。

それと同時に、悪魔たちの増殖も止まっていた。

悪魔たちは、再び人間を襲うために、どんどん集まっていた。しかし、七つのしるしによって、それは打ち砕かれた。

ペナルティは、凄いことをした。あとは、どうやって地球を戻すかだけだ。

## Ⅱ 第228話 人間＋環境Ⅱ

人間は環境には今まで、少ししか興味を示さなかった。そのつけがここに来ていたのである。

しかし、中には、そんなの偶然だと思っている人が出てくる。それは当然である。

その一人が、ある集団を作ろうとした。

その男は、どうせ、町がこんな状態になったのならば、いつその

こと、超巨大な最先端な町にしようと計画し始めた。これを全国でやろうと、仲間を集め始めた。仲間を集めることなど簡単だった。インターネットを使えば、ひよひよいのひよいだ。そして、インターネットで会議を開いた。

「私たちは、今、何一つ持っていない。しかし、プラス思考で考えれば、国を一揆に最先端にすることも可能なのである。そうすれば、ますます人間の生活が豊かになる。もしかすると、仕事のほとんどが、家でできるようになるかもしれない。そうすれば、災害が来ても、この前のように帰宅困難者を作り出さなくてすむようになる。ぜひ、皆さんの力でこの国を一から作りなおしましょう。」

会長の言葉にみんなが賛同した。皆、新しい便利な生活にあこがれていた。

オール電化・地下新幹線などなど…。

しかし、まだ誰も気づいていなかった。それは、それを行うと必ず、人間の身に振り返ってくるということだった。

しかし、人間たちは、環境のことを考えなかった。いや、考えていると錯覚していた。

その頃、ペナルティは、その情報のある町で聞いた。そして、ペナルティは思った。

これでは、また、人間が犠牲になる。

ペナルティは焦った。まだまだ、環境破壊が続いているからだ。いくら、何をやろうと無駄だ。

しかし、ペナルティには気づいていないことがあった。

環境を大事にするには、その分、人間が、生活の質を落とさなければならぬということに。

## Ⅱ 第229話 人間の欲望Ⅱ

ペナルティは男のところへ向かっていた。



そんなころ、男を誰かが訪ねてきた。その人とは、ワイリーだった。「今、一人の少年がこちらへ向かっていると聞いた。私は、あなたの手伝いをさせていただきたい。」

ワイリーは言った。しかし、どこからそんなデーターを見つけてきたのだろうか。

そんなことよりも、ペナルティに強力な対抗馬が出現したのだ。

ワイリーは考えていた。ペナルティを封じるために、熱斗を使うことにした。

しかし、一体、どうやって熱斗を使おうというのだろうか。

そして、ワイリーはその男と会談を済ますと、時空へ向かった。そして、弱った熱斗を必死で探した。ワイリーにも熱斗がどこにいるか、大体見当がついた。

ついに、熱斗を見つけた。

そして、熱斗たちを護衛していた集団をネットナビたちに倒させた。護衛もまたネットナビだった。

ワイリーは喜んだ。こんなに順調に作戦が進むとは。

しかし、これには、李がただ黙っているだけではなかった。

李にはどうやら秘策があったようだ。

そんなことも知らずにワイリーは熱斗にある薬を飲ませた。それは、あの操るための薬だった。

しばらくすると熱斗は目を覚ました。ワイリーはこう言った。

「さあ、私の言うことを聞くのだ。」

熱斗の目は死んでいた。他の人から見れば、お前はもう死んでいる状態である。

ワイリーは熱斗にペナルティを倒すように指示した。

熱斗は了解してしまった。いや、熱斗の頭脳は動いていなかった。しかし、この薬には弱点があった。ワイリーはまだ分かっていなかった。なぜなら、未来ではそんな食べ物なかったからである。

知らずのうちに自分から弱点を作ってしまったワイリー。しかし、ペナルティはこの弱点を見つけることが出来るのであろうか。

Ⅱ第230話 欲望に漬け込む、分裂Ⅱ

ワイリーはついに作戦を実行に移すときが来た。

ついに、熱斗とペナルティが対決するのだ。亀田興 のときよりも  
凄いいことが起こるのだ。（大体、あんなのは、ありなのか。そんな  
のが通用するならば、世の中は、一体なんだ？）

ペナルティはそのことを知らなかった。

ペナルティは、ついに男の所へ近づいた。しかし、玄関の前にいる  
のは、ワイリーと熱斗ではないか。

ペナルティは一瞬、目を疑った。

まさか。そんな言葉がペナルティの心の中を駆け巡った。

しかし、現実には、ペナルティに隙を与えなかった。ワイリーは言っ  
た。

「攻撃するのだ。君が持っている力で。」

ペナルティはその言葉にぞっとした。そして、ペナルティは思った。  
俺はどうすればいいのだ。

ペナルティは、熱斗とロックマンの攻撃を受けそうになった。しか  
し、時が止まった。

「一体、どうしたのだろうか。」

ペナルティは不思議がった。しかし、自分の上から声が降ってくる  
のに気がついた。その声はこう言っている。

「私は、あなたたちにもう力を貸すことはできないと思っていまし  
た。しかし、今のあなたには、まだ力が必要です。」

「一体、君は。」

ペナルティは尋ねた。

「名を申すほどのものではないです。ただ、あなたたちには、歯が  
立たない。私たちの力を使わなければ。」

そして、何かがペナルティの体に入ってきた。そして、今度は体の  
中から声が聞こえた。

「さあ、これで、あなたとあなたのお友達の力は平等になりました。目を覚まさせてあげてください。」

その言葉が終わると、急に時が動き始めた。あっ。やられるとペナルティは思った。

しかし、熱斗の攻撃は止まった。まるでバリアを張っているようだった。

「あなたはシンクロチップを持っていますか。」

体の中から誰かが聞いた。それにペナルティは答えた。

「いいえ。この力はあなたのものですか。」

しかし、その声はペナルティのことを無視していた。

「そんなことよりも、まず、あなたが、戦いに勝つことです。」

そして、次にある現象が起きた。

ペナルティ3 - 3 (第231話〜第240話)

Ⅱ第231話 ペナルティ、クロスフュージョン。Ⅱ

ペナルティはクロスフュージョンした。ペナルティはもう頭が真っ白になった。

その頃、梅園先生はあることを思い出した。それは昔聞いた話だった。

「面白い話って知っているかい。」

「えっ。それなに。」

「聞きたいかい。」

「うん。」

幼かった梅園少年は、その人の話を聞きました。

「え。これから、君に、やってもらいたい役があるんだけどいいかい。」

「うん。」

「じゃあ、おじさんが質問したら答えてね。」

そして、おじさんは話し始めた。

「昔、ある村に黒豚がいました。その豚は、町を荒らすことが趣味だったので、町に大きな被害を与えました。そこで神様はあることをしました。何をしたと思う?」

純粹だった梅園少年はこう答えました。

「宇宙に飛ばしちゃった。」

梅園少年は何を思ったのでしょうか。それは、当時流行っていた、宇宙の星を聞いていたからです。(というか、書いているときに、地上のを聞いているからこういうことを書くんだ。)

「それじゃ。黒豚が死んでしまうじゃないか。」

なぜか、悲しい雰囲気になった。

「私が、冬の雪の降っているときにわざわざえさをやりに行った、

豚なんだ。そんな豚を殺されてたまるか。」

まるで感情移入したように男は言った。

梅園少年は怖かった。しかし、そんなことを気にせず男はしゃべり続けた。

「そして、神様は、黒豚を動けないように村の前につないでおきました。そうしたら、黒豚のしつぽがだんだん白くなっていくではないですか。尾も白い。面白い話。（この話は、私の中学の時の数学教師が伝統的に話していた面白い話を改造したものです。ああ。だんだん寒気がしてくる。）」

そんな不思議な梅園少年の話でした。

これで一件落着。（って、ペナルティはどうなったんだ？）

## Ⅱ 第232話 ペナルティvs熱斗Ⅱ

ペナルティは緊張した。熱斗を倒せば、とんでもないことになる。

しかし、熱斗は攻撃を仕掛けてくるばかりだ。それを守るだけでも精一杯だ。

どうすればいいのだろうか。

しかし、もう攻撃するしかなかった。初めてだった。まさか自分がクロスフュージョンするとは思っていなかった。それに、PETなんかでバトルしたことだってほとんどない。まるでいきなり、闘牛場で戦わされた感じだ。

ともかくチップを使った。

その頃、天空の城ラピュタ？じゃなくて、神様たち（神様家族じゃないゾ。李も含まれていた。）は、ペナルティと熱斗の戦いを空の上から見ていた。

「珍しいですね。じきじきにごらんになれるのは。」

李が言った。

「私は、あの二人に興味があります。力はない。しかし、友人に囲まれて、非行には走らない。そんな少年を久しぶりに見ました。」

どうやら神様も興味津々のようだ。

そうとは知らずに、ともかく戦っているペナルティ。そして、操られて、頭脳が停止している？熱斗。

ペナルティは必死に戦った。しかし、熱斗を折ることはエレベストに登るよりもきついだろう。

自分の中の葛藤。そして、弱さ。

ペナルティは考えた。

なぜこんなところで戦っているんだろう。本当なら、普通に日常を過ごしていいんじゃないか。

なぜ、神は俺と熱斗を戦わせるのだろう。まさか、俺をおもちゃにしているんじゃない。

ペナルティはそんなことを考えてしまっていた。しかし、神様はここが注目だったのだ。

さすがに、神様にも、人間を操ることはできない。それは、人が頭脳を持っているからだ。

しかし、人が考えそうなことくらい分かっている。人間にもわかるぐらいなのだから。

神様は、ペナルティの踏ん張りを見たかったのだ。

ペナルティは、それに必死に耐えた。

そして、ついに李は出動した。出動場所とは…。

Ⅱ第233話 梅園先生出動（110番）Ⅱ

李は未来に来ていた。（ついでに、つくば未来市じゃないので…。）

そして、ある男に会っていた。

その男とは、梅園先生だった。

李は言った。

「熱斗がワイリーに操られて、ペナルティを攻撃している。」

その言葉に、梅園先生の頭脳は救出のカードを引いていた。

しかも、梅園先生には、ワイリーとの苦い記憶があった。

それは、某地方駅のロータリー。

梅園先生は、友人に会いに時間近くかけてこの町にきていた。そして、梅園先生が帰ろうとしたときだった。一人の女性が、暴力団風のお兄さんに捕まっているではないか。

これは、助けなければならぬ。女の人は悲鳴をあげていた。

「やめろ。」

梅園先生は、電車男のようになっていた。

「おう、なんだ。お前。」

暴力団風の男が向かってきた。そのときだった。

「やめなさい。」

そこに出てきたのは、ワイリーだった。なぜか暴力団風の男は、ワイリーにこう言ったのだ。

「すいません。」

まるで、力関係でもあるかのように。

そのときはまだ、世の中で、ワイリーが暴れるようなことはなかった。

世の中で暴れるようなことがあったのは、それから、ずっと後のことだ。

しかし、梅園先生は未だにワイリーに未練を残している。もしも、俺が女の人を助けていたら、今頃、ゴールインして、子供生んでいたのに…。

そんなことだった。しかし、そういうことが2倍になり、倒そうとする原動力になるのである。

そして、梅園先生と李は、2006年に向かうのである。

熱斗とペナルティは泥沼戦状態だった。

熱斗の攻撃をペナルティが受けこたえる状態だ。

ワイリーは裏からこの戦いを楽しんでいた。ワイリーは熱斗とペナルティを戦わせて、両方を消耗させようとしていた。

しかし、その後、急展開をすることになることはワイリーには分かっていなかった。しかし、それは、確実に実行されようとしていた。

「第234話 目覚めよ熱斗」

さて、ついに動き出した梅園先生。

しかし、この戦いをとめられるのであろうか。梅園先生は、PETなど持っていない。

どうやって熱斗の暴走をとめればいいのだろうか。

それには、ひとつしか道がなかった。それに梅園先生は気づくのであろうか。

梅園先生は2006年に来て思い出した。自分が食べたことがあるパンで、こんな商品を。

それは、「頭脳パン」だった。（イトウパン）

梅園先生は思い出した。それは、子供の頃だった。成績が悪い自分に親が少しでも頭がよくなるようにと食べさせてくれた。

ネーミングはなんだか、怪しかったが、今から考えてみれば、自分が先生になったのだって、もしかすると、このパンのおかげかもしれない。

熱斗にも食べさせれば・・・。

なんだか、自分が馬鹿らしく見えてきた。そんなの効くはずがない。梅園先生はそんなことを思った。しかし、まさかそれが効くとは…。ともかく、お店という店を訪ねた。

しかし、今では、取り扱っている店も少なかった。やっとの思いで見つけたのは、お店で最後のひとつだったものだ。

「熱斗。今待ってる。」

梅園先生はダッシュで走った。しかし、店を出て、50メートルのところで転んだ。

「ファイトー。一発。」

梅園先生は勇気を振り絞った。

しかし、そんなことをしている間も、ペナルティと熱斗は戦っているのである。



すぐに梅園先生は起き上がった。そして、再び走った。梅園先生の心は、空っぽだった。ただ、熱斗とペナルティを助けるために。

そして、ついに、ペナルティのところへ着いた。

「ペナルティ！」

梅園先生の大きな声にペナルティは気がついた。

そして、最後の力を振る絞り、熱斗を四の字固めをした。

「やめろ。」

熱斗は抵抗するものの、生徒にいじめられないように、リングに上がった梅園先生は、そう簡単にはあきらめなかった。

「さあ、食べる。」

「やだ。」

その言葉を見捨て、無理矢理、そのパンを食べさせた。そうすると、熱斗は穏やかになった。

ワイリーは驚いた。一体何が起きたのだと。

Ⅱ 第235話 永遠と共に・・・Ⅱ

ワイリーは失敗したと思った。薬の効能が消えてしまった。結局、ワイリーには、逃げると言うカードしか与えられなかったのだ。

ワイリーはそのカードを引いた。

梅園先生は熱斗にこう言った。

「だめじゃんか。」

熱斗は何が起きたのか分からなかった。

そして、そこに李が現れた。ペナルティは頭を下げた。

「ペナルティ、何で頭を下げているんだよ。」

ペナルティは梅園先生に説明を始めた。

「李さんは、実は、G O T Eの近くの人間だったんだ。」

その言葉に、梅園先生は氷ついた。

「そうです。もう、いろいろな人に知られてしまいましたね。しかし、私には分かったことがあります。それは、ペナルティは一人では戦えない。仲間がいるからこそ、ペナルティは強いんだということ。」

李の言葉に何か熱くなるものを感じた。感動ではない。そう。今までのことをほめてくれた。そして、自分には仲間が必要だということも。自分でも思っていた。熱斗やマオがいなければ、成り立たなかった。

自分は、人に助けられているんだということ。

ペナルティは、思い出した。前、人は、助け合っていくものだ、道徳でならなかった。

それが、今、現れているのである。

李は続けて言った。

「さあ、あなたたちにうれしいことがあります。私についてきてください。」

そして、李は、熱斗とペナルティ、それに、梅園先生を引きつれてあるところに向かった。

広い草原の中を、誰かが休んでいた。

ここはどこだろうと思った。そして、そこにいる人がこちらを向いた。

「あなたたちが、ついにここまで上り詰めてきましたね。」

それは、あの時の女の人だった。

「あなたたちの活躍を見守っていました。ぜひ、これからも、この純粋な心と、勇気ある行動を忘れないでください。これからは、機会があつたら、李のほうから、お願いをしにいくでしょう。あなたたちは、人間界にいないなければならない存在なのです。」

ペナルティたちは、なんとなく、思った。

自分たちは、必要とされているんだと。そして、これからも、この仲間と一緒に行動を共にしていくんだと。

「第236話 あわてんぼうの子猫？」

熱斗たちは無事に、元の世界に戻れた。しかし、まだ、ペナルティには、環境問題のことが気になっていた。自分には抑えられなかった問題。それは、地球の誰がやってもそういうことになるであろう。逆にペナルティは、がんばったと李は思っていた。

そう。あそこまで踏ん張れるのは凄いことである。

そして、日曜日。熱斗は、昨日と反対の方向のところで目を覚ました。

「おお。もう、学校に遅れる！」

熱斗は飛び起きた。そして、食パンを手に持ち、急いで家を飛び出る熱斗。

「なぞ起こしてくれなかったんだロックマン。」

熱斗が声をかけても、起きないロックマン。

勘違いをとめられないまま、秋原中学に到着。

そこには、何十人という人がいた。よく見てみると、前に立っているのは、あの健太郎ではないか。

「馬鹿だな、今日は日曜日だ。しかし、制服も着ないで学校に入るとは、間抜けにもほどがあるな。」

健太郎はそう言った。熱斗は初めて普段着で着てしまったことを知る。このときほど恥ずかしいことはないだろう。小学校のときは、別に何を着てようと自由だが、中学からは、決まっているのである。なお、余談だが、公立中学・高校の制服は、旧日本軍の軍服を模したといわれている。さすがのマッカーサーもこのことに気づかなかったのだろう。

さて、健太郎は続けてこんなことを言った。

「まあいい。どうせ、普段は、ゴキブリのような服を着ているのだから……。」

だんだん、怪しくなってきた。だいたい、なぜ、こんなところに健太郎がいるのかが不思議だった。

「どうやら、俺たちがいるのが不思議らしいな。」

健太郎は言った。熱斗の思っていたことを簡単に見破られてしまった。

「なぜか、それは、お前を襲うためだ。」

「なぜ、そんなことが分かるんだ。」

熱斗は聞いた。

「それは、お前が今までしたことをあらさがして、この日を見つけたからだよ。迷子の迷子の子猫ちゃん。」

もうこの言葉で怪しさ十分である。どうやら健太郎が何かたくらんでいるのが目に見えた。

Ⅱ第237話　ゲイ・ロワイアル？Ⅱ

前回、怪しさ満点で終わったペナルティ3。

さて、早速本編に入りましょう。（だいたい、なぜか、ゲイがたくさんひそんでいる某中学校があるからって、こんな企画立てるなよ。）

熱斗を見て、健太郎は言った。

「お前は、もう逃げられない。お前はもう、やられている。」

謎の言葉に熱斗もぼかんとしてしまった。

「さあ、勝負をしてみよう。皆の者いいか。」

健太郎が後ろにいる何十人もの人に向かって言った。

「只今より、ニホンホモ連合の集会を始める。」（桜塚やつくんか！）

そして、熱斗のほうをホモたちが見る（人間扱いしろよ。）

「さて、ここに獲物が一匹います。…」

健太郎の言葉に、熱斗はとてつもないことを想像した。

“釜焼き、（それは、さすがにない）鉄板焼き（それもない）、トトロ焼き（って、一体何？）、ピンポン玉をくわえる（なんだ、

そりや。）」

「この獲物を学校内に放ちますので、それを捕まえてください。捕まえた方は好きなようにしてください。」

「俺は、物じゃない。」

熱斗の発言もむなしく消え去った。

「さて、用意はいいですか。」

健太郎の言葉に、熱斗は焦った。この連中に見つかったら、釜焼きにされる（だから、釜焼きにはされない。）

急いで熱斗は隠れた。

「準備はだいじょうぶでいいですか。」

皆は、「いいとも!」と言った。

そして、一斉にスタート。さあ、熱斗は、礫になるのでしょうか（キリストのようににはならないし、第一、キリスト教の人から御苦情をもらうではないか）

熱斗は、ともかく隠れた。そこは、理科室。骸骨の人形が置かれていた。

さすがにここには近寄ってこないだろうと思った熱斗。確かに10分くらいたって誰も来なかった。

「やった。」

しかし、これが、裏目に出ることになる。

いきなり、校内放送が流れた。

「こんにちは。さて、このどこかに、我々の目当ての奴がいるらしい。」

それはまさしくワイリーの声だった。

「隠れていないで出てきなさい。もう、お前は逃げられない。」

ワイリーは健太郎を使っていたのである。

「第238話 最後に笑うのは誰」

熱斗はワイリーに見つかってしまった。しかし、健太郎の姿が見当

たらない。多分、追い返したのだろう。

ワイリーは言った。

「お前の大事な人は、もうそろそろ元の世界に帰らなければならなくなる。」

「一体、どういうことだ。」

熱斗はワイリーの言った言葉に疑問を感じていた。

「つまり、法律によって、帰されるのだ。」

ワイリーはそう言った。

熱斗は思い出した。あの法律を。まだ、時空法はあるのだ。ただ、いろいろな出来事があったから忘れていたのだ。

「もしも、お前が、かばったら、お前は、たとえ子供でも死刑になるのだ。」

ワイリーの不気味な声が聞こえた。

「さて、私の目的はそんなことではない。もしもよければ、手を貸してくれないか。この政府を倒して……。」

「そんなことには手を出さない。」

熱斗は言った。

「たとえ、ペナルティが戻ったとしても、俺の心の中にはずっと残っている。あの楽しかったこと、つらかったこと。それを、法を犯してまでかばったりしない。」

熱斗は成長していた。こんなこと、前には言えなかった。しかし、まだ、ペナルティと別れたくないとは心は潜んでいた。人生では短くとも、今の熱斗の中では、長くいた。ペナルティがいたから、マオにだって会えたのかもしれない。まだ、ペナルティとは別れたくない心が生まれるのは当然である。

「そうか。じゃあ、お前とは敵になるんだな。それなら、今倒してしまえ。」

ワイリーがさういうと、いきなり、大きな物体がネット上に出現した。

「さあ、これをとめてみる。」

ワイリーは笑いながら言った。

熱斗はこれを倒さなければならなかった。熱斗はロックマンをブラグインした。

しかし、相手は強かった。

いくら攻撃しても通用しなかった。

その頃、炎山たちにも出動命令が来ていた。一体、倒せるのだろうか。

「第239話 ネット世界は？」

熱斗たちは必死に戦っていた。しかし、相手は倒せなかった。

このままでは、クロスフュージョンが解けてしまう。

どうしても倒さなければならなかった。しかし、それはただ焦らせるだけだった。

このままではどうしようもなかった。

ただただやられていくだけである。

「今回は、わしの勝ちみたいだな。」

ワイリーは言った。

「そんなので終わらせてたまるか。」

熱斗はこう言った。

その時、体に何かが起こった。それは、力が復活したのだ。（復活

祭だ。牛丼だ。）

「ロックマン。」

熱斗は獣化をすることにした。

急に、攻勢が逆転した。どんどんやっていくロックマンと熱斗にやられて、ついに敵が倒せた。

「やった。」

これで、ワイリーの野望が打ち砕けた。

しかし、打ち破れなかったことがある。それはペナルティとの別れだった。

これは、いくらがんばっても無理なことだった。

熱斗は、自分はどうすればいいのか迷った。ペナルティはこのことに気づいているのだろうか。

その頃、ある敵が近づいていた。

その敵は、今までの敵とは違った。しかし、まだだれもその存在に気づいていなかった。

熱斗は疲れて、家に帰った。明日は、月曜日。宿題があったものの、そんなものできなかった。お風呂からでると、すぐさま爆睡した。

ロックマンが熱斗を起こそうとするがぜんぜんだめだった。

次の日、それは突然起きた。しかし、皆は気づかなかった。

次の日、熱斗が起きた。そして、気がついた。

「宿題やるの忘れた！」

ペナルティはきちんと宿題をやっていた。ペナルティは、これが日常茶飯事なので気にしない。

熱斗は焦った。ましてや、宿題を出したのは、あの怖い数学の先生だからとんでもない。

しかし、まさか、それが帳消しになるようなことが起こるとは、熱斗にとってはうれしいことだと思うが、それは、うれしいことではなかった。

## Ⅱ 第240話 虚界？Ⅱ

熱斗たちは朝の混乱のあと、すぐに朝食を食べて、学校に向かった。学校に到着にすると、教室には一人の男が立っていた。生徒ではない。

「さて、今まで何とか越えてきたみたいだが、それはただ運が良かっただけだ。それも今日が終わりだな。ある意味、お前たちの付けが回ってきたのだから。」

「一体どういうことだ。」

ペナルティが聞いた。



「それは、この世界が後もう少しで消滅してしまうということを意味しているのだから。」

ペナルティは思い出した。李の言っていた言葉。環境破壊をペナルティが止められなかったときのことを。

李は言っていた。現実のような現実ではないようなという言葉。

それが今、ここに現れているのだらう。

「そうだ、お前が思っていることが正しい。私は、神を超えた存在、新しい神だ。」

それが校舎内を響いた。

ペナルティと熱斗は固まった。

「おれは、神から10年前認められた者だ。しかし、神は俺に他の奴らの尻ふきをさせた。」

新神は強く言った。

「しかし、人間というのは、直らない。だから、俺は人間がいやになった。だから、人間になど未来など与えない。」

男は怒っていた。

「それでも、人間は努力している。」

ペナルティは言った。

「人間は努力していない。あんなの努力といえない。」

男は言った。

「そういえば、君はもう過去に戻るんだよな。未来など、君には関係ないよな。」

ペナルティは、気づいた。あの法律があることを。そして、この世界から元の世界に帰らなければならないことを。

熱斗との別れが近づいている。

ペナルティもようやくそれに気づいた。しかし、この男を止めなければ、ペナルティは帰れなかった。

「ようやく気がついたようだな。人間は、首をまたもや絞めてしまった。」

男は哀れそうに言った。



## ペナルティ3 - 4 (第241話〜第247話)

Ⅱ第241話 動き始めた政府Ⅱ

水面下で、国は動いていた。それは、ペナルティの存在を脅かすようなことだった。それは、ある人物が言ったことだった。

「どうやら、科学省は、過去から人を連れてきたらしい。何人かはその後、帰ったようだが、まだ一人だけ残っているらしい。それをどうにかしなければ、過去が大変なことになる。」

その言葉を聞いた首相はすぐに、貴船長官を呼んだ。

「一体、過去から来た人物がいると聞いたか、それは、本当か。」

貴船長官はこのときが来るのが怖かった。しかし、今は話さなければならなかった。

「はい。確かに、一人だけいます。」

そおして、首相は言った。

「なぜ、それを早く言わなかった。それでは、過去が狂ってしまう。」

「しかし……」

貴船長官の言葉も聴かずに首相は決めた。その少年を捕まえると。そして、すぐに捕獲隊が結成された。

「さて、長らく滞っていた。ペナルティ容疑者の逮捕、そして、元の世界に戻すことを行う。」

隊長らしき人物が言った。それに一人の隊員があるものをさしだした。

「これが、トド凍っていたものです。」

「駄洒落かい。」

隊長は怒った。

「そんなのでは、ペナルティという少年を捕まえられないぞ。」

「逮捕しちゃうぞ。」

「なにを言っているんだ。お前は、両津勘吉か。」

「はい、佐渡島？北朝鮮？」

隊員は駄洒落を連発し、隊長の気分を大いに損ねてしまった。ともかく、隊長と隊員たちは、ペナルティ狩りに出発した。

ついにペナルティに熱斗との別れが来るのである。

そして、隊長たちはペナルティを発見した。ペナルティは、その人たちの目的がなんだか分かっていた。そして、自分は、熱斗を見捨てて、元の世界に戻らなければならないことを。

しかし、自分にはどうしようもなかった。いや、未来の人はこれを答えとしたのだ。ペナルティの存在のことを。

Ⅱ第242話 さよならⅡ

ペナルティは、静かに言った。

「みんなに別れを言いたいので、少し待ってくださいませんか。」

隊長は躊躇した。もしかすると逃げるかもしれない。しかし、いくらなんでも突然の別れはきつい。大人ならまだしも、中学生では。

「いいぞ。しかし、必ずここに帰ってくるのだぞ。」

隊長はそう言った。ペナルティはうれしかった。

そして、早速熱斗の所へ行った。しかし、熱斗の前までは行けなかった。お世話になったけど、別れが来たことを言えなかった。

その頃、貴船長官は首相に会っていた。そして言った。

「あの子は、この世の中に必要なのです。」

「しかし、決まりは決まりです。例外を出すわけには行きません。」

首相はそう言った。

ペナルティはついに戻ることになった。もうその道を修正できない。隊長に連れられ、科学省についたペナルティ。そこにいたのは、残念ながら交渉が決裂した貴船長官がいた。

「今まで、ありがとう。自分の力が弱かったから、君を止めることができなかった。どうか許してくれ。」

「いえ、それがいいのでしょう。どちらにも。」

そして、ペナルティは、元の世界に帰った。

その頃、親神は、予定通りの結末に喜んだ。

そして、ついに新神は動き始めようとしていた。

その夜、熱斗はペナルティがいけないことに気づいた。それを察知した祐一郎はこう言った。

「熱斗、ペナルティは残念ながら帰ってしまった。多分もう会えないだろう。前みたいには、理由は分かっているはずだ。」

熱斗は分かった。何もかも。これからは、自分と炎山やライカたちとこの世界を守らなければならないことを。

そして、親神が攻撃してくることも。

親神はついに攻撃することを決めた。攻撃は、あさつてに決めた。

「あさつてが人類の消滅の日だ。」

新神は言った。

## Ⅱ 第243話 人類消滅前日Ⅱ

そして、次の日。熱斗たちは科学省に集められた。もう、新神の侵攻がくることは、政府も分かっていた。そして、それに対抗するために、ネットセーバーを出すことにした。

「今日は皆、忙しい中、集まってくれてありがとう。もう知っているとは思うが、新神という人物が襲ってことは確かだ。しかも、最初に狙われるのは、ここだ。そこで、ここに明日の八時に集まってもらふ予定だ。多分、明日が大変な一日となるだろう。」

貴船長官はそう言った。

熱斗たちも危機感を募らせていた。

その頃、新神は着々と準備をしていた。そこにある一人の男が尋ねてきた。それはワイリーだった。

「あなたとどうやら馬があるらしい。」

ワイリーは新神にそう言った。しかし、新神は反論した。

「いや、どうやら、あなたとはあわない。あなたは地球征服だが、私は、人間を殺すために動いている。どうやら、俺と手を組んで、地球を征服しようとしているみたいだが、それはできない。人間は殺されなければならない運命なのだ。」

ワイリーはこの男との交渉が難航することを感じた。

「今、着実に作戦のために準備をしている。もうそろそろ準備のほうへ戻っていいか。」

新神はそう言った。しかし、ワイリーはあきらめられないようだ。

「じゃあ、聞くが、今までに地球の環境を破壊することをしたか。それによって俺の判断は変わる。」

それはワイリーにとっては交渉決裂する道具だった。しかし、ワイリーは正直に答えた。

「じゃあ、俺は手を組むことはないだろう。」

そして、新神はワイリーを追い出した。

新神は集中して準備に再び取り組んだ。そして、ついに夜、その計画ができるようになった。

あとは、時がすぎるのをただ見ているだけだった。

## Ⅱ 第244話 決戦Ⅱ

ついに朝日が顔を再び出した。これが人類最後の朝日となるのであるのか。

熱斗はまだ凄い状況で寝ている。ロックマンが熱斗を起こそうとするが、よっぽど大きな声でないと起きなさそうである。そして、ロックマンは、熱斗に大声で叫んだ。

「光 熱斗！！！！！！！！」

さすがの大きさに、熱斗も起きた。しかしロックマンもこんな少年がオペレーターとは、大変である。

そして、朝食をとると、すぐさまに科学省に向かった。

その頃、新神は、ウィルスを科学省に送るために待っていた。一見、

弱そうに見えるが、実は、このウイルスは強かった。今真野とは比べ物にならないほどに。

そして、8時。新神はウイルスをついに科学省に送り込んだ。  
「来たぞ。」

科学省では予想通りの展開にほっとした。しかし、まさか、ウイルスを倒すのに時間が蚊かkとは思いもしなかった。

熱斗たちは、すぐにプラグインして、ネットナビと戦わせた。しかし、敵は強かった。

ウイルスは自分で攻撃チップを転送するのだ。

もしかするとウイルスではなく、ナビに近いかもしれないが、それでもウイルスなのだ。

ウイルスに熱斗たちは苦戦した。0（ゼロ）のときよりも。

そして、新神は次のことに行動を移した。

新神は、近くのタワーに上がった。そこにはひとつのボタンと、ガスを吸わないためのマスクが用意されていた。

「人間め、おろかな。」

そして、新神は、ガスマスクを装着すると、ボタンに手をふれた。

「これで人間は死滅するのだ。」

そう。そのボタンの先から発射されたのは、有毒ガスだった。しかし、他の有毒ガスとは違った。

そのガスは、人間しか死滅しないのだ。

新神は、驚異的な科学力で人間たちに襲い掛かっていたのだ。

そんなことは知らずに熱斗たちはウイルスと戦っていた。

熱斗はなんだか体が重くなるのを感じ始めていた。

Ⅱ 第245話 倒せぬまま・・・Ⅱ

熱斗たちは、感じていた。自分の体がだんだん重くなり、体が言うことを利かなくなってきたことを。

それと同時に、ウイルスたちの攻撃によって、ロックマンたちもま

た、ヒットポイント（体力みたいなもの）が落ちていった。

しかし、必死に戦った。でも、だんだん体が利かなくなっていた。そして、炎山が言った。

「まさか、ここを攻撃するのが目的ではなく、あるガスを大量にまいているのではないか。」

しかし、もう遅かった。新神は、誰にも見つからずに、ガスをまいていた。

それを吸ってしまった熱斗たちにはもう何もできなかった。そして、ネットナビたちもまた。

ついに、一人倒れた。

「大丈夫か。」

炎山が声をかけた。その瞬間、炎山も倒れた。その少しの間にも倒れていく。

最後に熱斗が残っていた。しかし、だいぶガスが大量に体の中に取り込まれていた。

ついに熱斗も倒れた。

「熱斗くん。」

ロックマンが声をかけた瞬間、ウイルスに攻撃を受けてしまった。

そして、ロックマンも倒れた。

ウイルスたちが攻撃しようとしたとき、あるナビが現れた。そのナビを見た瞬間、ウイルスたちはおとなしくなった。

「所詮、ネットナビと言うのはこれしか強いのはいなかったか。」

ナビはそう言うのと、ウイルスたちと共にどこかに消えていった。

そして、そのナビは、新神のところに行った。そして、こう言った。

「新神さま。おめでとうございます。無事に人間たちは倒れました。」

その報告を聞いた新神は、さらにボタンを押した。

「そうか。おれは、やっと地球から、人間を排除できたのか。これからは、生態系が元に戻ることだろう。」

そのころ、神はじつとそれを見ていた。神は迷っていた。



人間を殺してしまえば、自然が戻ることは確かだ。しかし、人間の中には、自然を大切にしようとする人間もいた。そこまでしなくてもよかった。

と神は思った。神は、なぜ、新神が襲ってこないか心配にならないのであるうか。

それには、理由があった。

新神は、ある日、神の前に来た。そして言った。

「神様、私は、人間たちを処罰するために人間界に行ってまいります。しかし、ご安心ください。あなたの地位は今までと変わりません。」

その言葉を神は信じていた。そして、そのとき、新神を止められなかった。よつぼどの理由がない限り、新神を止めることは無理だったのだ。

## Ⅱ 第246話 2003年Ⅱ

ペナルティは元の世界に戻ってきた。

どうやら、親は心配していたらしい。警察に相談までしに行ったらしく、ペナルティの再会の時には、号泣していた。

しかし、ペナルティには居心地が悪かった。今までの友達が消え、新たに中学で一緒になった奴ばかりしかない中学校に通ったのだ。精精、小学6年のときの友達が戻ってきたくらいだった。

さらに中学の中は荒れていた。授業はぜんぜん進んでおらず、ペナルティは容易についていけた。しかし、周りは、茶髪や、携帯電話などをいじっている奴、さらには、暴力を振っている奴までいた。小学校のときとは環境が変わってしまった。

クラス内の状態は散々だった。ペナルティは家に帰ると、すぐに部屋にもぐりこんだ。

そして、自分のPETを見た。

今は、ナビはいない。しかし、まだ本体はあった。机の引き出しに

入れっぱなしにしておいた。もしもこんなものがばれたら、とんでもないことになる。だから、机の一番右上の鍵のかかる棚に入れた。それを引っ張りだしてみると、あのときの楽しい時間が思い出された。

熱斗との、そして、マオとの思い出がたくさん思い出された。

そんなある日、それは、風が強い日だった。何隻もの船が沈没するぐらいの大風の日だった。ペナルティは、夜、急に空が見たくなつた。なぜか知らないが…。

そして、夜空を見るためにベランダに出た。

空をたくさんの星が覆っていた。東京とは思えないぐらいに鮮明に見えた。

普通は、東京で空を見たって、せいぜい、一等星ぐらいしか見えない。しかし、その日は違った。4等星ぐらいまで見えた。ペナルティにはそんな経験はなかった。

そして、その空から、あるひとつの星が消えた。その瞬間をペナルティは見てしまった。

最初はびっくりした。

しかし、それは本当だったみたいだ。さっきあつた星が消えることにペナルティは違和感を感じた。まさか、偶然に星が消えるはずはないとペナルティは心に言った。しかし、ペナルティの心の中には、熱斗に何かあつたのではないかという心が芽生えていた。

## Ⅱ 第247話 新神のさらなる秘策Ⅱ

新神は、人間が未来から消えたことに満足感を覚えていた。

しかし、新神は、これだけでは、何も解決はしていないと感じた。

新神は、思った。

人間が、狩りをしたがためにマンモスが消えた。そして、人間は、魚を取り、肉を食べた。さらには、サルをおちよくったりしている。そんな人間たちなど、地球にはいなかったことにしなければ、その

動物たちに迷惑がかかってしまう。

そう考えたのだ。

しかし、まだ、誰も気づいていない。というよりも、新神がいることを知っているのはペナルティぐらいだろう。

しかし、それはまだ早いかもしれない。熱斗がいなくなった世界で神がある会議を新神なしで行っていた。

「まことに残念だが、人間たちは消されてしまった。いや、私が許可してしまったといったほうがよいのだろうか・・・」

神は困っていた。しかし、それは閣下もそうだった。

そして、ついにある者が口火を切った。

「これは、いずれ大変なことになる予兆ではないのでしょうか。」

確かに、誰もそれを思っていた。しかし、今の時点では、新神は何もやっていない。いや、やっているのだが、わざわざ、神の前まで来て、神への攻撃はしないと約束した。

神の閣下はみな、約束は守らなくてはならなかった。それは、当然のことだった。

しかし、それを疑問視することは、今までなかった。

決まりだったからだ。しかし、今は違った。それによって、人間たちを救わなければ、いずれ何らかの形で仕返しがかかるのではないか。つまり、神離れである。一時、日本でも起きていたが、今は信じてくれていた。しかし、その神が助けなければ、また神を信じなくなってしまう。

それを皆が怖がった。そして、新神を退治し、元の世界に戻すことが決まった。そして、実行班の中にペナルティの名前が挙がったのだった。

しかし、まだ、ペナルティはぜんぜん知らなかった。そして、今はただ普通の生活をしていた。まさか、こんな話が来るとは思ってもいなかった。

しかし、確実にXデーは近づいていた・・・。

ペナルティ3・4（第241話〜第247話）（後書き）

今までありがとうございました。引き続き、ペナルティ4をどうぞ  
お願いします。（ペナルティ4は都合上、第254話までになりま  
した。）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0243b/>

---

ペナルティ3

2010年10月9日00時10分発行